

は志高くと論じ、卒業時には厳しい社会で生き抜くには実力不相応な夢に寄りかかってはだめだと現実主義を説き、彼らに強くなれ、逞しくなれとばかり言わざるを得ない現実がある。専門学校という場では、こうした矛盾、こうした限界から眼を逸らすことはできない。彼らを叱咤激励するばかりでは事態は改善されないのだ。

要するに、仕事の就き方について新しい道を探ろうとする若者たちの行為は、結局は彼らだけの世界では完結できず、不可避免的に社会全体のあり

方の組み立て直し、あるいはそこまで言わないとしても、彼らの模索を全うさせられるだけの社会的仕組み作りという、大人たちも含めた大テーマへと進まざるを得ない。若者たちの新しい選択に拍手する大人たちには、先行者としての若者たちが突きつけたこの大テーマに関して、彼らと共に格闘することが求められているように思える。仕事づくりをめぐる協同活動はこうした文脈の中で大きな意味をもっていくのだろう。

手づくりの企画「川田龍平講演会」

——黄柳野高校生のとりくみ

成し遂げた講演会

古山 賢

1997年1月18日(土)午後1時。川田龍平さん講演会スタート。テーマは、「がんばる人のLIFE & MESSAGE」。そう…、この講演会を成功させるために歩んできた道は長かった。

前回の講演会の教訓『計画は1年前にすべし』を頭に思い、計画は約1年前にたてられました。4月には、川田さんの母・悦子さんに龍平さんの出演依頼をし、とてもいい返事もらいました。しかし、予定は未定。計画はスムーズにいきませんでした。出演が確実じゃない為、先の見通しがつかず、何も手につけられないまま月日が流れていきました。そんな中、持ちあがった話は、東京に行って龍平さんとの直接交渉でした。話はすぐにまとまり、東京へ行きました。そこで龍平さんの講演を聞き、最後に代表の福田君が交渉を挑みに行きました。龍平さんは心よくOKしてくれま

した。学校へ戻ってからの僕たちはOKの返事もらった事で、すこしそわそわしていました。しかし、ここからが悪戦苦闘の始まりでした。龍平さんと講演会の日を決めるために、FAXなどで遣り取りしました。しかし、返事がなかなかこないという状態で、決まらないまま月日が流れていきました。日が決まらないのでポスターもチケットもつくれず、宣伝活動もできませんでした。

結局決まったのは約1ヵ月前。みんな慌てて作業にとりかかりました。ちょうどこの頃バンド「ルーズ」が演奏に來られなくなったなどのハプニングが重なり、まさにパニック状態でした。そんなこんなで、どうして成功にもっていったのかというと、みんなの協力でした。喋った事のない1年生やサークルでない人達、さらには一般の人達による協力に支えられ、僕たちは少しづつ先が見えてきて、そこからラスト1週間、根性とチームワークで乗り切っていきました。前日も徹夜で頑張りました。

よって、生まれたものは『成功』であり、それ

生徒の想い伝わる
新城文化会館を埋めた1300人



川田龍平講演会
1月18日

「私たちと同じ若者が、必死に生きようと闘っていることを、たくさん仲間達に知ってもらいたい」と考えた川田龍平さんの講演会。東三河の高校に呼びかけ、地元で職場や団体に参画やポスター掲示をお願いし、さらに宣伝カードでの街頭宣伝まで生徒たちは取り組みました。

一月十八日は豊川高校からバスで駆けつけるなど、地元を中心に千三百名を超える人達が新城文化会館を埋め尽くしました。九十三年に山田洋次さん、竹下景子さんを招き開いた、つげ野ジャンボリー以来の新城での大きな集いとなりました。



公演する川田龍平さん

「つげの春秋」より

がおおきな『感動』にもつながり、そして見に来てくれた皆さんに伝わったのだと僕は思っています。出演していただいた川田龍平さんをはじめ、出演者の皆様もすばらしい講演、演奏、手話をさせていただいてさらなる感動をあたえてくれた事に感謝します。薬害は忘れてはいけない問題です。みなさんも真剣に取り組んでほしいです。

最後に、講演会に協力してくれたスタッフ、生徒、一般の人、舞台裏の人など、その他大勢の人達に感謝の心を込めてあつく一礼します。

1997年1月18日（土）午後5時。終演。

「がんばる人のライフ・アンド・メッセージ」を終えて 高野 洋

「僕たちで、大きい事をやれる」最初ぼくはこの思いでわくわくしてやり始めました。

薬害エイズをもっと沢山の人を知って考えてもらえる、出演者を通して、生きる前向きさを感じてもらえる、僕たちにもすごくプラスになる、これが僕にとっての行う意味です。

今まで僕は、こういう会を一般の人向けに企画したことはなくて「人集めをがんばれば大丈夫だろう」と思っていました。

でも実際に始めてみると、具体的な方法を考えたり、どれだけの事を準備すれば良いかわからず後おくりになったりしていました。そして、少しずつやる事が見えてくると今度は、やらなくてはいけない事とせまって来る時間と分担と責任などにはさまれる様な気分になりました。集中力が続かずに、たまっていることにイライラしたりもしました。少し考えが安易だったかもしれないと思いました。

それでもそういう時は、インフォメーションのみんなと少しぶつかったり、いっしょにやりながら、なんとかやって来ました。周りの人もたくさんたよりにしました。そういうたくさんの方を集めて、なんとか当日を行うことができました。

やり終えて、本当によかったです。

自分のまだたりないところ、こういう事の難しさもたくさん見えたし、たくさんの方が来てもらえて、聞いてもらえました。いろんな人に、しっかりプラスになったと思います。

足らない所も沢山ありましたが、それも含めて良かったです。今回は、かたちをつくることで手いっぱいでした。もっと中味を話して練ることもすごく大切だと思いました。

今もまだ残っていることや、このまとめを作るなどやることがあります。それも、うまくいかないこともあるけど、一つづつしっかりやっていきたいです。——楽しい世界にできたらいいです。

僕は考えた、全国の人たちと……

福田 正樹

H I Vインフォメーションは、生徒たちによって自主的に運営をしているサークルです。一昨年11月頃から、エイズ問題について考えようと、5名で勉強会を始めました。H I Vインフォメーションを始めた理由は、薬害エイズについて、考えたい、そして偏見をなくそうと私たちの出来ることから始めました。まず数人の人たちと一緒に考えようと呼びかけをしました。そして、毎週勉強会をして、校内から偏見のない学校にしようと、ニュースを書いて、みんなに知ってもらおうと取り組みました。

今までに僕たちは、色々な運動に参加して来ました。豊橋駅前での署名運動をやったりしました。96年2月14日～16日東京厚生省前でのすわり込みに参加しました。雪の降る中いっしょうけんめい大きな声をだして心から謝罪をしてほしいと厚生省を見上げました。その夜、厚生省は責任を認めました。その時に思ったことは、一人の力は少しだけどみんなの力が集まれば大きな運動になると思った。薬害エイズの勉強会やパレードに参加し、薬害エイズ・エイズの影響をうけてくるしんでいる人たちに住みよい社会になるように僕はガンバッテいます。僕たちから何か大きな運動をしようと言うことで、多くの人たちに、今、薬害エイズのことを知ってもらおうと思い、川田龍平さんに新城で講演していただきました。川田龍平さんとは、H I V感染者であることを公表し、東京H I V訴訟の原告団に加わった方です。僕たちが講演会を企画しました。準備期間が短かったけれども、多くの市民の人たちにささえてもらい、講演会が出来ました。新城・豊川・豊橋の店の人たちに協力してもらい講演会のポスターを、毎日授業がおわってから、みんなではりに行きました。ポスターをはらせてもらうのに、色々と言われたけれど、それにもまげず、スマイルでガンバりました。今回は、学校のスタッフにも協力して

もらい新しい教育にもつながればいいと思います。

黄柳野高校を作るみたいに、市民の人たちにも協力していただき、1月18日(土)新城文化会館大ホールで講演会が出来ることになりました。多くの人に、講演会に参加してもらい、いっしょに薬害エイズのことを考えられたと思います。川田さんが講演のなかで言われたことで心に残っているのは、和解は成立したが、解決していないと指摘していました。僕もまだまだ解決できてないと思うし、もっともっと早く資料をだしてほんとうにわかったと心から謝ってほしいです。これからも、私たちからもっと和解にちかずけるようにガンバります。

これを読んでいるみなさん、いっしょにかんがえて下さい。僕たちは和解のことばを信じて前に前に進んでいきます。みんなであしたを作りましょう。



協同集会に参加下さった須田万知子先生は、「地道に自分で自分の目標を見つけていく子どもの力は大きいものです。学校のワクを越えて一人の人間として取り組んでいます。おとなも一人の会員として関わっていきたい。」と電話の向うで話して下さいました。(編集部)